保育実習ノートから①

保育実習を体験した学生たちの、ノートをそっと見る機会を得ました。実習生と、実習生を受け容れた幼稚園の先生との交流も偲ばれる美しい交換ノートの数葉をご紹介しましょう。

（註　Tさんは大学四年生、四月からこの園に就職する）

◈TさんからK先生へ

二月十三日（月）　雪のちくもり　年長みどり組

＊朝、雪かきをしたり、先生のお手伝いをしながら子どもを待つ。自分たちのクラスに突然の〝新顔〟が入って子ども達もおどろいた様子。それでも「おはようございます」と声をかけると、小さな声で答えてくれる。いつものことながら緊張してギクシャクしてしまう。

＊高鬼、すわり鬼、色鬼など、遊びの変化にとまどいながらも、子ども達の笑顔と元気な声に引っ張られて遊んでいる自分に気づく。いつ、何時でも子ども達の生き生きとした姿は何よりも魅力的である。男の子達は積木でいろいろの仕掛けをつくっていた。一人がつくり出すと他の子もそれを真似て思い思いにつくり始める。友達の活動に誘発される様な形で自然に遊びに入っていくことは、先生に言われてやるのとはまた違った楽しさがあるのではないか、と思った。自分で考えてつくった仕掛けを「見て、見て」と自慢そうに教えてくれた、そんな時の子どもの充実した気持ちを共感できる様にならなければいけないな、と思った。

＊一日目ということで全体の流れが気になってしまい、あまり細かいところまで目が届かなかった。また、あまり自分が遊びに夢中になると回りの子ども達の様子が見えなくなる為、遊びに没頭する度合いがむずかしいと思った。自由に遊ぶ時間が多いせいだろうか、「これぞ子ども！」という程、元気な姿を見せてくれて感激してしまった。自分の気持をとても素直に表わしているようだった。子ども達においていかれない様に、そして子どもから教えられること一つ一つを大切にしながら過ごしていかなくては、と思う。

◈K先生からTさんへ

きれいな文字を見るのは気持のよいものですね、こども達はすぐ、なにによらず先生に影響されやすく、まさに「学ぶ」とは「まねる」ことにほかならないと、幼いだけにこわくなります、私が「た」という字をたて長に「た」と書いていました。当時はゴム印は使わず、お知らせでも、絵本でも、ペンで名前を書きました、クラスの子どものおばあ様に、「先生ですね、横を短く書くのは」と言われました。先生の動きも、言葉づかいもすぐにまねるので鏡のようです。

◈TさんからK先生へ

二月十五日（水）　くもり　みどり組

＊けんちゃんが泣き叫びながら積木をくずし始めた。回りの子に理由を聞くと、「入れて」も言わずに入ってきたことから喧嘩になったらしい。けんちゃんの興奮した様子におどろいてしまい、怪我のない様にするだけで精一杯だった。こんな時は、子どもを責める前にどうしてその様な状況になったのか、また子どもはどんな気持なのだろうか、ということをよく考えてあげなければならないと思った。泣いていたかと思うと仲良く大きな戦艦づくりの仲間に入っている。

＊お帰りのとき「友達はいいもんだ」をうたった。誰に言われたわけでもないのに、一番前の列の男の子達が肩を組んでうたいだし、他の子ども達も何人もそうした、きっとこのうたのメロディーや歌詞を子どもなりに受けとめた結果、自然に肩を組むということになったのだと思う。私達大人が忘れてしまった「感じる心」が子ども達にはあるのだな、と思うと、うらやましくさえなった。そしてそんな純粋な感性を大事に育てていかなければなあ、と思った。